

大館鳳鳴高校山岳部員岩木山遭難事故について

(風化防止のための資料)

令和7年1月 校長 深井裕之

1956年(昭和31年)、日本マナスル登山隊が世界8位の高峰マナスルに世界初登頂を果たしたことをきっかけに、昭和30年代の日本は空前の登山ブームに沸きました。そして、1964年(昭和39年)には、日本が戦後復興期から高度経済成長期へ移行することを象徴するかのように東海道新幹線が開業し、東京オリンピックが開催されて日本選手が大活躍しました。1964年は輝かしい年として日本人の心に記憶されています。

そんな明るさに向かって1964年の正月を迎えた日本で、そのムードをかき消すような大変悲しい事故が、本校で発生しました。山岳部員5名のパーティが標高1625mの岩木山で遭難し、うち4名が凍死したのです。2年生の石田隆司君、乳井孝司君、畠山勉君、1年生の金沢吉郎君が帰らぬ人となってしまいました。(当時の生徒として敬称を「君」とします)。現在生きていれば、77から78歳、高校17、18期生に当たります。

この大事故は当時日本中で大きく報道されましたが、当事者の本校でさえも現在は生徒手帳の校史欄に記されておらず、学校要覧の沿革欄に「1月6日 山岳部員岩木山にて遭難」とあるだけです。この事故のことを詳しく知る人はほとんどいなくなりました。山岳部では慰霊登山を現在も毎年行っていますが、大きな追悼行事などは、関係者の高齢化などもあり、五十回忌を節目として次第に途絶えていきました。

このような大きな事故や災害で一番悲しいことは、風化が進み、命の大切さや教訓が忘れ去られてゆくことです。私がこの事故のことを知ったのは、今から40年程前の高校在学中のことで、旧校舎で慰霊碑が床に放置されていたのを見たことがきっかけです。事故からまだ20年も経っていなかった当時でさえ、事故を伝える大切な慰霊碑がぞんざいに扱われており、人に事故の話聞いても、心ない噂話が一人歩きしていて、犠牲者や生存者、関係者やその家族に対する誹謗中傷的なものが多かったことは大変悲しいことでした。この事故のことを調べているうちに、「学校に届けを出さないで勝手に登った。」とか、「岩木山のような身近な山で遭難するなんて。」という声についても、そう単純な話ではなかったと思うようになりました。

この資料は、事故の当事校としてこの事故を風化させないために、また、事故の正しい情報を知る手がかりとして、そして、命の大切さを改めて考えるために、同窓会に残る「遭難誌」を元にまとめています。

今後、生徒や教職員が入り替わったとしても、これ以上事故の記憶が風化しないように、大館鳳鳴高校の歴史が続く限り読み継いでもらいたいと願います。携帯電話はおろか固定電話も普及しきっておらず、機能的な登山装備や衣類などもなかった時代背景なども想像しながら読んでもらいたいと思います。

【 登山に至る背景と経緯 】

昭和39年は、10月に東京オリンピックが行われることから、通常は秋に行われる国体が前倒しで行われるというイレギュラーな年であった。そのために登山の国体予選も例年より早くなり、秋田では4月早々に鳥海山で開催されることになった。山の4月はまだ真冬であり、冬山登山の技術が必要となることから、本校山岳部では、例年12月に県教育委員会と高体連との共催で行われる冬山・スキー技術講習会(この年は12月26日から四泊五日の日程)に参加することが重要と考え、12月6日には申込書を提出していた。

この申し込みの段階の要項では、講習会の詳細は後日連絡すると記されており、山岳部員たちはスキーを準備するなどして待っていたが、12月24日まで待ったものの、詳細な要項が届かず主催者とも連絡がとれず、身動きが取れず、泣く泣く参加を断念することになった。

このため、参加予定だった部員達から山岳部長の先生に、岩木山で訓練したいという要望が出された。しかし、この時、部長からは、当時の1、2年生部員に厳冬期の登山経験がほとんどないことや、指導者の3年生は受験期でOB達も都合が付かなかったことから、岩木山行きを認めないことを言い渡されている。

翌25日、石田君と畠山君が改めて部長に交渉に訪れた。当時は無届けの冬山登山が横行しようだが、部長は、提出された計画に無理がなく、不許可にすると無届けで行う恐れもあると考え、登頂は絶対にしないこと、五合目の焼止り下のスロープでスキー訓練することなどを念押ししてスキー訓練として計画を認めた。

また、この時点では遭難した5名に加えて山岳部以外の生徒2名も参加メンバーに入っていたため、山岳部としてではなく、一部の山岳部員を中心とした生徒有志によるスキー練習として、個人の資格で参加することを条件に、計画書と旅行届を提出することになった。この時、すでに冬休みに入り各個人が担任から許可を取ることが難しかったため、山岳部長が担任の代わりに旅行届けの責任者欄に捺印し、計画書については翌26日に改めて旅行届とともに提出することになった。

その後、岩木山への出発までの間にあった重要な出来事として、参加者は部長との約束とは違い山頂への登頂の準備も進めていたこと、岩木山に雪が少ないことがわかりスキー目的で加わっていた山岳部以外の2名が

参加を取りやめたこと、山岳部から岩木山の経験がある2年生の三ツ倉君が新たに加わり、実質は山岳部員のみ6名で岩木山に向かうことになったことなどが挙げられる。

ここで、後日さらに大きく問題になった出来事が一つあり、26日に提出する予定だった旅行届と計画書の提出が31日の大晦日に行われている。ひとけのない職員室の担当者の机にだまって置かれた二つの届けは、遭難の一報があった1月7日まで人目に触れずに放置されることになった。このことが結果的に、校長の承認を得ない無届け登山というかたちになってしまい、世間から叩かれることにつながった。なお、部長の先生は、帰省先から石田君に宛てて、絶対に登頂しないことや焼止りより上の山岳地帯でのスキー訓練を行わないことなどを改めて念押しする手紙を出していたのだが、その思いが彼らに届くことはなかった。

【 出発から遭難まで 】

1月4日（土）第一日目

2年生の石田君をリーダーに、乳井君、畠山君、村井君、三ツ倉君、1年生の金沢君の6名が、大館駅6時36分発の列車で出発。のはずが、遅刻者が出たため、一部が後発のバスで弘前に向かうなどして、予定よりだいぶ遅れて10時過ぎに弘前で合流し、バスで岩木山登山ルート of 起点にあたる百沢地区（標高170mほど）に向かった。百沢の登山口から登山を開始し、予定では五合目の焼止り（標高1070m地点）にベースキャンプを張る予定だったが、出発が遅れたことやそのドタバタで疲労したことから、途中の避難小屋に一泊することになった。畠山君の残した登山日記には「2m四方の小屋に6人で寝たので窮屈であり眠れなかった。夜の室内気温6度。朝マイナス7度。」とある。

1月5日（日）第二日目

5時20分起床。全員寝不足で疲労が回復しないまま支度をして朝食を取り出発。昨日のうちに着く予定だった焼止りに10時55分到着。ベースキャンプのテントを張る。この日は特に雪上訓練は行わなかった。

1月6日（月）第三日目 登頂の日

6人のうち最後に加わった三ツ倉君がベースキャンプに残ることになった。彼はこの訓練が、部長に約束した通りのスキー訓練だけと思いきや、かんじきなど冬山登山の装備を持参せずに参加したためである。

冬山装備の5名は三ツ倉君に「14時までには戻る。」と告げて7時45分に山頂（標高1625m）を目指して登頂を開始した。この時の天候は雪がちらつく程度で、山頂こそ見えなかったが吹雪ではなかった。

後の調査では、パーティーは登頂途中で他の登山者1名と前後しつつ登頂していたことがわかっている。この登山者は途中小休止しているうちに鳳鳴パーティを見失い、吹雪になってきたため途中下山している。

5人は14時を過ぎてもベースキャンプに戻ってこなかった。心配した三ツ倉君が、彼らを探しにテントを出たが、かんじきがないため胸まで雪にうまって前に進めず、また、吹雪が強くなって身の危険も感じたためテントに引き返した。近く焼止りヒュッテに弘前高校山岳部の4名のパーティが宿泊していたので情報を求めたが手がかりはなく、何かあった場合の協力を依頼してテントに戻り、吹雪の中、眠れぬ一夜を明かした。

1月7日（火）第四日目（捜索一日目）

三ツ倉君は夜明けを待って弘前高校パーティ4名の力を借りて山頂に向かったが、天候が悪く1時間ほどで引き返した。麓に救助を求めるために、弘前の2名に同行してもらい百沢集落に向かって下山し、11時頃に到着して食堂に協力を求めた。食堂では周辺の旅館等にパーティが降りてきていないか確認してくれたが、情報が得られないため遭難を確信し、12時20分に弘前警察署に通報した。学校へは13時50分に大館警察署から遭難の一報があり、学校では緊急に職員会議を開いて対応を協議した。大館では自発的な捜索隊が編制され、弘前では弘前警察署長を本部長とする捜索本部が百沢集落に設けられた。15時15分、弘前の一次捜索隊5名が捜索に向かったが、悪天候等のため焼止りヒュッテに到着したところで捜索を断念した。

【 捜索の記録 ① 】

1月8日（水）第五日目（捜索二日目）

捜索隊は夜中の0時40分にヒュッテを出発。悪天候で山頂に到着したのは8時だった。山頂の山小屋には人の姿や暖を取った形跡がなく、備え付けのノートに「一月六日、大館鳳鳴高校山岳部（一一時一〇分着、天気ふぶき）石田、村井、畠山、金沢（三ツ倉）」の記録を発見した。（この時のカッコ書きの三ツ倉君の名前が一人歩きして、当初は6名が遭難という情報が流れた。）

このノートにより、パーティーは登頂した後に遭難したことが判明し、下山ルート of 弘前側を重点的に捜索することになるのだが、実際には反対側の鯉ヶ沢側に迷い込んでいたため、発見が遅れる結果となった。

なお、捜索隊が山頂に到着した時点での気温はマイナス20度、風速は20～30mという話が残っている。

午後には捜索隊の体制が整えられて規模を拡大して捜索し、天候も回復してきたため陸上自衛隊のヘリコプター2機も投入したが、手がかりは得られなかった。

1月9日(木) 第六日目(搜索三日目)

全国から報道が駆けつける中、弘前側で大規模な搜索が続けられるが手がかりは得られず。夜の搜索会議では、生存の可能性が少なくなってきたことから翌日発見できなければ搜索を縮小することが決定された。

弘前側で見つからないことから鱒ヶ沢側でも小規模な搜索が開始される。地元搜索隊が夕方に長平集落付近で足跡を発見。暗くなって搜索は断念したものの遭難者のものと判断して、夜中に鱒ヶ沢警察署に通報。

1月10日(金) 第七日目(搜索四日目)

鱒ヶ沢側の搜索が強化される。10時30分、遭難者のものと思われる足跡を発見し追跡、12時20分頃に前夜ビバークしたと推定される痕跡を発見し、さらに追跡。13時、大鳴沢の牧野で雪上にうずくまっている人影を発見した。声かけに反応し村井君と判明。厳冬期での冬山遭難後98時間、奇跡的な生存が確認された。

村井君は搜索隊に背負われて集落まで運ばれ、夕方に鱒ヶ沢の病院に収容された。村井君生還のニュースは搜索隊を奮い立たせるとともに全国に発信され、病院にはたくさんの報道が押し寄せた。

この発見を追うように14時10分、頂上直下北面の搜索隊がビバーク跡を発見、村井君の証言と合わせて、残り4名も全員が鱒ヶ沢方面に迷い込んだことがわかり、搜索の主力は鱒ヶ沢に移された。

【 救助された村井君の主な証言 】

1月6日(月) 第三日目 遭難一日目

11時過ぎに山頂に到着。小屋のノートに記録を残して昼食を取り、正午に石田君の指示で下山を開始。ベースキャンプ帰着予定時刻の14時頃、道しるべを見てまだ9合目を歩いていることに気づく。この頃から急激に天候が悪化し始め、焦りの色が濃くなる。山頂に戻るか下山を続けるか意見が分かれたが、下山することに決める。雪をかき分け極寒と吹雪で磁石を頼りに歩き続けたが、現在位置を完全に見失う。身を寄せられる岩陰を見つけてビバークすることを決める。ローソクで暖をとり、強風に耐えて一夜を過ごす。

1月7日(火) 第四日目 遭難二日目(搜索一日目)

猛吹雪がかなり収まり夜明けを迎える。現在位置が不明なまま沢を下る。昨夜の強風で地図や装備の一部が飛ばされる。精神的疲労が大きかったリーダーの石田君が昼頃に歩行困難になり、交代で肩を貸して進む。15時頃、今度は1年生の金沢君も力尽きて歩行困難名になったため、岩陰を見つけてビバークに入る。マッチが濡れていて暖が取れない。畠山君が1時間ほど単独で下山を試みたが、人里はまだ遠く戻ってくる。倒れた2人に寄り添いながら5人かたまって一夜を明かす。

1月8日(水) 第五日目 遭難三日目(搜索二日目)

朝、気が付いた時には石田君と金沢君は氷のように冷たくなっていた。乳井君の姿もなく、荷物を残したまま助けを求めに先に下山したと思われる。現場に赤い布きれの目印を残して、畠山君と2人で乳井君を追った。ラジオで搜索隊が山頂に向かっていると知ったが、自分たちが遭難しているという意識はあまりなかった。

畠山君が川に落ち、這い上がるために体力と体温を奪われ正午頃に力尽きた。岩陰に休ませ、残りのビスケットと、スイッチを入れたラジオを置いて、乳井君を追った。暗くなったため林の中で一夜を過ごした。

1月9日(木) 第六日目 遭難四日目(搜索三日目)

天気が回復し寒さをしのげるようになったが、足の感覚はほとんどなくなった。何度も倒れながら乳井君を追った。時々ヘリコプターの音を聞いたが、遠過ぎて発見してもらえなかった。木を伐採している音が聞こえたがそのまま乳井君を追った。どのようにビバークしたのか覚えていないが雑木林で一夜を過ごした。

1月10日(金) 第七日目 遭難五日目(搜索四日目)

雑木林を抜けると牧場のような所に出た。乳井君の足跡は相当蛇行していたが、それを踏み外さないように歩いた。いつの間にか疲れて座り込んでしまった。近くで物音がしたのに気付いた。搜索隊に発見され、乳井君が下の方にいるので搜索してくれとお願いした。

【 搜索の記録 ② 】

1月11日(土) 第八日目 遭難六日目(搜索五日目)

村井君の証言と、彼がたどった足跡を頼りに山頂方向に向かった搜索隊の一隊が、13時10分、雪の下に手応えを感じて掘り進めたところ、一遺体を発見、畠山君と確認され収容された。疲れて眠ったような姿で、顔には青い毛糸の帽子がかぶせてあった。他の搜索隊は疲労の色が濃く14時過ぎにその日の搜索を打ち切った。

1月12日(日) 第九日目 遭難七日目(搜索六日目)

畠山君発見地点の上を搜索した搜索隊が、9時27分、1.5kmほど先の岩陰で、赤い布きれをつけたストックの先端を発見。スコップで1mほど掘ったところ二遺体を発見した。付近を搜索していた本校職員によって石田君、金沢君と確認された。赤い布は、出発の朝、石田君の母親が持たせたものだった。

1月13日(月) 第十日目 遭難八日目(搜索七日目)

残る乳井君の発見に全力を尽くすも、悪天候や雪崩の危険性もあり、昼過ぎにこの日の搜索を終了。搜索隊の疲労も極めて濃く、今後の搜索打ち切りの要望も強くなったが、乳井君の出身地の比内町から70名の搜索隊が向かったとの知らせもあり、明日の搜索は規模を縮小しつつ天候を見ながら行うことを決定。

1月14日(火) 第十一日目 遭難九日目(搜索八日目)

最後の搜索という気持ちで、村井君発見場所を起点として広範囲に搜索。鳴沢川沿いに足跡を発見し追跡。途中で川に滑り落ちた跡や対岸に渡ったような跡を発見し川沿いを重点的に搜索。11時55分頃、比内消防団を中心とする搜索隊が川付近の雑木の陰にかがみ込んだ状態で凍死している遺体を発見、同行していた兄によって乳井君と確認された。

雪に埋もれていた遺体が、前日の雨で姿を現したことで発見に至ったもので、村井君が発見された場所とは百mと離れていなかった。また、前日の搜索縮小・打ち切りの決定を受けて、昼で搜索を引き上げる直前での奇跡的な発見となった。医師による死亡推定時刻は1月9日頃と判定された。

ここまでの八日間の搜索について、搜索本部が置かれた岩木町や鯉ヶ沢町の住民や関係者、警察、自衛隊、青森・秋田両県の山岳団体はじめ、多数の人員が動員された。直接搜索に当たった人員だけで延べ千二百人を越えている。搜索にかかる費用については当事者が負担することが原則であり、岩木山に登った6名の家族が莫大な額を背負うことになったが、全国から多大な義援金や支援が寄せられ、それを使って支払われることになった。



(遺体収容の様子)

【その後】

収容された遺体は検視が行われた後、家族の待つ自宅に運ばれ、葬儀が行われた。1月24日には、本校体育館において合同慰霊祭が行われ、生徒や職員だけでなく秋田・青森両県の関係者など約二千人が参列した。

同年9月には、この痛ましい事故を教訓に、全国から寄せられた義援金等を元にして岩木山9合目に「鳳鳴ヒュッテ」が建てられた。日本中が東京オリンピックに沸く中、10月18日、畠山君の発見場所近くの大鳴沢で慰霊碑除幕式が行われた。それ以降、五十回忌まで遺族や関係者が参加して慰霊登山が何度か続けられた。山岳部では現在でも毎年慰霊登山を続けている。学校としては昭和49年8月に遭難十周年慰霊祭を行っている。

この事故から11年後の昭和50年8月に東北地方で大雨による水害が発生し、遭難事故の際に現地基地が置かれた岩木町百沢地区では大規模な土石流が発生。死者22名、重軽傷者31名、家屋の全壊17戸等の大被害が出た。この時、本校では当時のお返しの意味を込めて、学校と生徒会が義援金を集めて見舞金を届けている。

学校ではこの遭難事故を風化させないため、事故後ただちに「遭難誌」の編集に取りかかり、遺族や搜索隊、関係者の証言や手記などとともに、遭難時の気象や再発防止に向けた課題なども加えて一年がかりでまとめあげ、一周忌の手向けとして刊行しており、この文章も、基本的に「遭難誌」に基づいて作成している。

この「遭難誌」は、以前は禁帯出ながら図書館に置いてあり生徒も読むことができたが、現在は同窓会に1冊と、山岳部に残るのみで、一般生徒は直接読むことはできない。しかし、青森県出身のノンフィクション作家田澤拓也氏が1999年(平成11年)に、この遭難事故取材した小説「空と山のあいだー岩木山遭難・大館鳳鳴高校生の五日間ー」をTBSブリタニカから刊行し、その年の優れたノンフィクション作品に贈られる開高健賞を受賞し話題となった。こちらは図書館の開架図書として貸し出ししており、現在も読むことができる。

また、NHKでは、この小説を原作として90分のノンフィクションドラマ「遭難」を制作し、2001年(平成13年)3月に全国放送して話題を集めた。このドラマには本校が資料を提供し、山岳部員などが役者として出演したり、遭難の一報を入れた三ツ倉さん本人がインタビューに答えたりするなどしている。このドラマの5分間のダイジェスト版はNHKアーカイブから視聴することができる。

令和6年10月には本校山岳部の創部百周年記念祝賀会があり、当時の関係者や岩木山に同行した三ツ倉さん、「遭難誌」編集者なども参加した。また、それに合わせるように当時の搜索や慰霊祭などを記録した8ミリフィルムが発見されてニュースになった。

同年12月、鳳鳴高校では、冬休み前の全校集会で本資料を使った校長講話を行った上で、冬休み明けの令和7年1月10日(村井君発見の日)に、学校主催としては51年ぶりとなる遭難61年目の追悼集会を体育館で開催した。また、「遭難誌」をPDF化して、生徒や職員が閲覧できるようにした。当日の集会の様子は秋田県内だけでなく青森県でもニュースになるなど話題となった。また、この集会を機に、長年行方不明となっていた本校所有の岩木山遭難レリーフが山岳部室から発見され、校長室に納められた。